

西條 勉著『古事記の文字法』

小 谷 博 泰

ここに納められた西條氏の諸論文は、學術研究のあり方に、一つの模範を示すものかと思われる。

たとえば、第一章の「古事記はだれが書いたか」では、はじめに亀井孝の論考をとりあげ、「古事記は、よめるか」という問題から「古事記はよめるかどうかの不安が、古事記が文字化されるときの不安、ひいては和語が漢字と出会うときの不安に根ざすものであった」と追求を深めながら、やがて、「安萬侶書き下ろし説」に対する疑問へと読み手を導いてゆく。津田左右吉や倉野憲司の主張した過去の説を分析し読み解いた上で、現在において課題とすべき事項が、ずばり切り出され、あるいは焦点を絞った中に浮かび上がらされてくる。

こうして「問い」を明確にしたところで、その考察のための具体的な材料、ここでは訓注の「風木津別之忍男神訓風云加耶」「八尺鏡訓八尺云」「於梭衝陰上而死訓陰上云宵登」など、問題となる例を取りあげ、本居宣長、小松英雄などの論考を引きながら、本文と施注者の関係へと論を展開してゆく。そこから、「古事記」本文の書き手と、本文の施注者とを分離分析する方向へと解明を進めてゆく。堅実な堂々とした論の押し進め方である。

読み手は、はじめは論理の箇所で読みよどむが、二度三度と読み返すうち、論じ方のみごとさに息をのむ思いがし、そこでとらえられた課題や、提示された資料の魅力についてこまれ、こちらも様々に考えさせられる。論理的な手がたい追究によって魅了しながら、しかもこちらの研究心をも刺激してやまないところ、私はふと、この論文の中で論考の対象ともなっている亀井孝や小松英雄の論法との比較を行なってみたい思いにもなった。それは私の手には余ることではあるが、ともあれ、いずれも論究の深さにおいて、日本的な一般の論文には見られない、ある種の魅力ある論文を書かれている方々ではある。

さて、本書は次の章立てによつて構成されている。

- 第一章 古事記は、だれが書いたか
- 第二章 阿礼誦習本の系統
- 第三章 記定・誦習・撰録
- 第四章 偽書説後の上表文
- 第五章 本文と訓注
- 第六章 本文と訓注・統
- 第七章 和語表現としての助字法
- 第八章 「似」と「而」の書き分け
- 第九章 「一（之）時」の構文と、その文体的位相
- 第十章 「於」の構文と、その表記史的位相
- 第十一章 文字構文の方法
- 第十二章 書かれた世界の由来について

右の第一章で全体的な課題が提起され、第二章―第四章で「古

事記生成論の前提」がまず考察される。稗田阿礼が誦習したとされる「帝皇日繼及先代旧辭」(誦習本)などの資料系統について論じ、『古事記』は天武紀十年三月条に記定される「帝紀及上古諸事」(記定本)が誦習本へ発展し、誦習本が古事記上表文に記されている「撰録」の作業を経て最終的に成立したとする、三段階のテキスト生成の過程を説かれている。

第四章は、『古事記』偽書説をめぐって論じることにより、氏の三段階成立論をさらに深め、確かなものとしているかのようである。

第五章、第六章は第一章においてすでに提示していた『古事記』訓注に関する分析をさらに詳しくし、「本文と注とのずれ」について念をおした上で、その背後にある『古事記』本文の「文字法」という大きな問題を提示している。

第七章、第十章は、『古事記の助字法』の具体的な追究により、「和語を書くことの文字法」をとらえようとしたもので、この部分は章ごとに綿密な調査による実証的研究がなされており、国語学的な立場からは、あるいは最も好まれる論文群と言えるかも知れない。

ただし、事実の指摘だけに終わらず、意味や語法の微妙な所にも考察の及んでいるところ、西條氏独特の論理的追究が見られると言えよう。たとえば、次のように。

／＼そこで、以の用法に特徴的なふたつの傾向に戻って考えてみると、まず「欲往妣国以哭」のように原因理由で用いられるときは、「ハハノクニニユカムトオモヒテ、ナク」という

和語構文においてテの意味がより細かく検討され、その機能に即した漢字が選択されていると言える。しかしながら、それは漢字で書くということを前提とするわけではないので、単純に正訓の用法とするよりも、和語のテをいったん形態素として取り出したうえで、その含意を分析するというかなり綿密な作業の結果とみた方がよい。

(第八章、二二三ページ)

第十一章は、既発表のものによらない、本書の新稿で、前章までの助字表記をめぐる考察を総合しつつ、文字列、構文、ひいては「古事記の全体を貫くその巧みな文字法」へと論を展開させてゆく。

第十二章では、以上の実証的な分析によりいちだんと深められた考証の上に、再び、「和語を―漢字で―書く」ということの大きな課題へと、『古事記』の文字法について理論を深めている。さて、この重力感のある研究書に、あえて杞憂のごときを述べるなら、逆説的になるが、その論考の背景に見られる明晰さといったようなものであろうか。

もちろん、何かを論じるとき、明晰さは大きな長所で、望まれるもの、というより必要なものでさえあるが、しかし、ほんの一、二の所で、事実は理論ほど明晰ではなかったかも知れないと、ふと感じたことがあった。

たとえば、第一章の「風木」の訓注に関する問題にしても、次のようにみごと明確に分析しおおせているところに感心しつつも、そこにかえて、いちまつの懸念のようなものを感じないでもない

かった。

ことばと文字表記のあいだには、語構成上のずれがある。「訓木以音」という注は、このずれを埋め合わせるために施されたものであろう。「風木津別」をカザモツワケと訓みつつ、「風木—津—別」の語構成に合わせるには、字音でモに宛てられる「木」の字に意味のふくみが暗示されねばならない。そのようなところから、「訓木（以音）」という注形式が借用されているのであろうと思うのである。

（第一章、二六ページ）

ところで、「訓風云加耶訓木以音」に「訓八尺云八阿多」の例を並べて考えると、前者は元来、「訓風木云加耶木」であったのを、後の転写者のさかしらによって「以音」などの余計なものが増えられた、そうした一種の誤写部分である可能性はないだろうか。もつとも、こうした書評における批判は、おうおうにして批判する側に不用意があつて、つまらぬ誤りをする場合が少なくないように見受ける。私のこの思いつきもその類かも知れない。御寛容を願う。

また、本居宣長をはじめとする、過去の諸論考を必要なるかぎり読み取って、それを理解されているのに感心するが、場合に

よつては、一論文についての解釈、ある論争についての考察だけで、いくつもの論考をついやすに足る大きな課題となる場合もあるであろう。他の研究者の論考を読み解くには大きなエネルギーがいる。たとえば、この西條氏の研究書にしても、とても私はまだ、全体を読み解くことができたなどとは思わない。「安萬侶書き下ろし説」を否定しておられることは確かで、それについては、私も全く賛成の外はないが、問題はそこから先にあり、その先の部分については、私はまだ氏の説を十分に読み取ったと記す自信はない。なお、これは言わずもがなのことだが、氏が考察にあたってよりどころとして引かれている諸論考は、おおむね適切な大論考と言えるものであるが、中に例外的にであるが、論拠が弱く内容が浅薄ではないかと私には思われるものもわずかながらある。

ともあれ、詳細に渡るしつかりした論拠の上に、鋭い指摘や深い考察を加えて、大きな課題をとらえた本書は、これからの「古事記」研究、上代の文字法の研究などにあたつて、必ず参照されねばならない、そうした重要な文献の一つとされるであろう。この一書がまとめられたことは、我々にとつても幸いであつた。

（平10・6 笠間書院 A5判 三七〇頁 八八〇〇円）